

海の遺跡、山の遺跡

—埋蔵文化財の宝庫—



みかんのへた山古墳と鍋島古墳（撮影：出水伯明）



蟻無山古墳群

赤穂市は、山に囲まれた北部と、瀬戸内海に面した南部とに大きく分かれ、それぞれに古墳が分布します。

こうした古墳のほとんどは、発掘調査が行われていないため詳細はわかりませんが、海に面して立地する古墳は、人々を養うだけの平野が存在しないことから、漁業集団のなかの有力者の墓ではないかと推定されています。一方、北部の古墳については十分に広い平野があり、農耕を生業として生活を営んでいた人々が生み出したものと考えられています。

赤穂市には南北それぞれに独特の人々の生活があり、遺跡や古墳もこれらを反映しているのです。

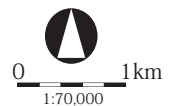
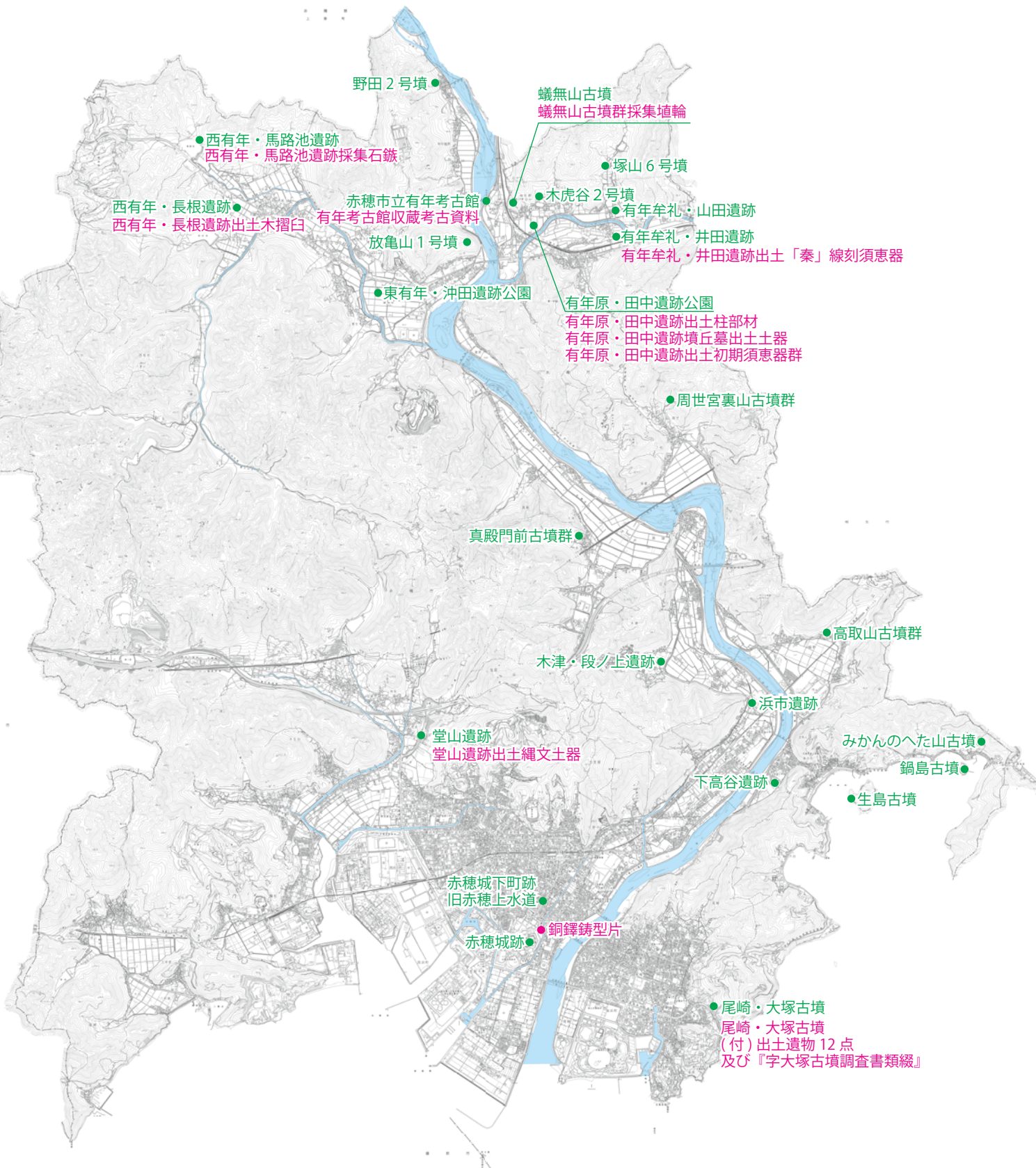


尾崎・大塚古墳



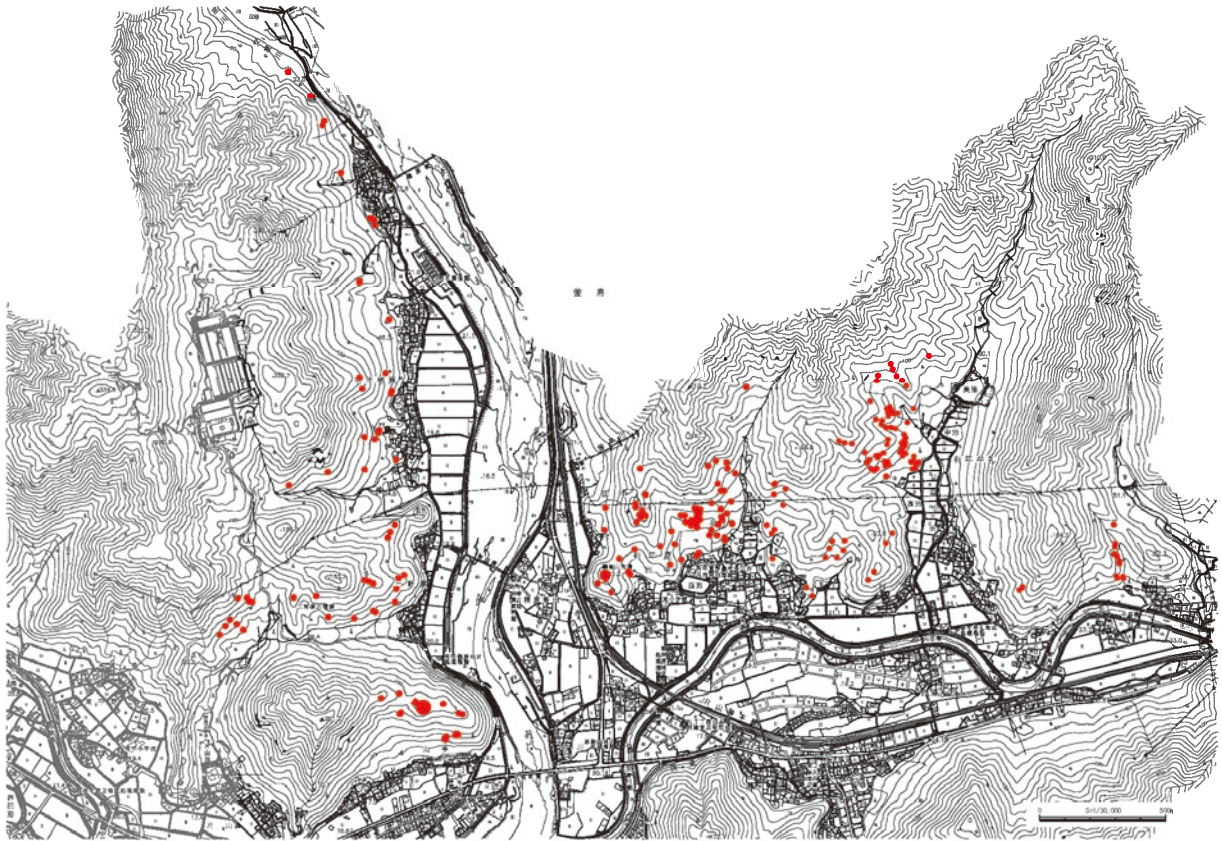
赤穂城跡

■主な歴史文化遺産の分布



凡例 ●もの ●場 ●こと

有年地区の遺跡・古墳



有年地区東部の古墳分布 平成25(2013)年度以降の分布調査によって明らかになった。総数219基を数える。

有年地区は「文化財の宝庫」と呼ばれるほど古代の遺跡が密集している地区であり、古くは縄文時代早期（10,000年前）から人々が生活を営んでいたことが判明しています。

遺跡数が特に増加するのが弥生時代（約2,300年前）からであり、有年地区全体に遺跡が見つかっています。このほか古墳時代後期になると、特に有年地区東部において数多くの古墳が築かれます。その総数は219基。西播磨でも代表的な古墳群である塚山古墳群には55基の古墳が密集し、「間仕切り」という特殊な構造を持つ横穴式石室が多くみられ、学術的にも注目されています。



有年原・田中遺跡
1号墳丘墓出土装飾土器



有年牟礼・山田遺跡 1号方形周溝墓



塚山6号墳のオルソ（正投影）画像



有年原・田中遺跡出土
初期須恵器・陶質土器

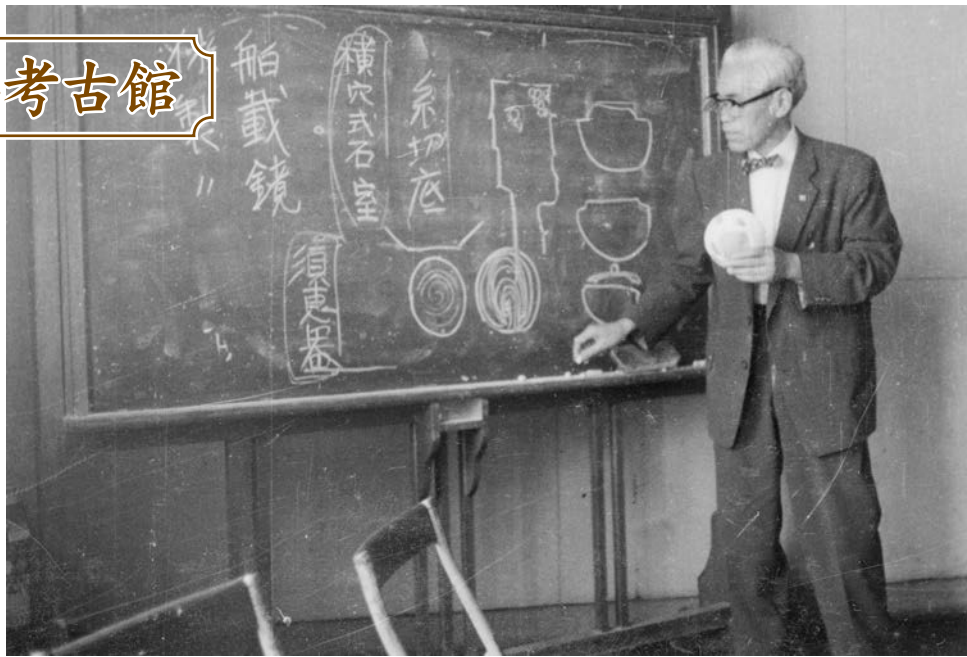


有年牟礼・山田遺跡出土
「秦」線刻須恵器

松岡秀夫と有年考古館

現在の赤穂市有年榎原に、兄の遺志を継いで眼科病院を構えた松岡秀夫。戦後、土地開発で失われていく遺跡を目の当たりにし、遺跡の保護と考古資料の収集を思い立ったのは43歳の時でした。

昭和25（1950）年には有年考古館を設立。「日本一小さい考古館」と異名をとりながらも、銅剣や三角縁神獸鏡をはじめとする貴重な考古資料が多く収蔵され、赤穂市、相生市、上郡町の古代史は有年考古館資料によって語られたといったも過言ではありません。



地域住民に文化財の価値を説く松岡秀夫
地域住民を自宅に集めては講義を行っていた。



有年の史蹟を守る会の活動
地域住民の約25%が会員となっていた。

また松岡は、地元住民とともに遺跡の保存運動を盛り上げ、多くの古墳を残しました。現在、有年が「文化財の宝庫」と呼ばれるのも、そのおかげと言えるでしょう。

有年考古館は、開館後60年を経て赤穂市に寄贈され、平成23年11月からは赤穂市立有年考古館として再出発しました。赤穂市では、当時の志を残したまま、有年地区の歴史文化をより楽しんで学習できる場に整備しています。



赤穂市立有年考古館内の常設展示



開館当時の有年考古館



現在の赤穂市立有年考古館

高雄・坂越地区の遺跡・古墳

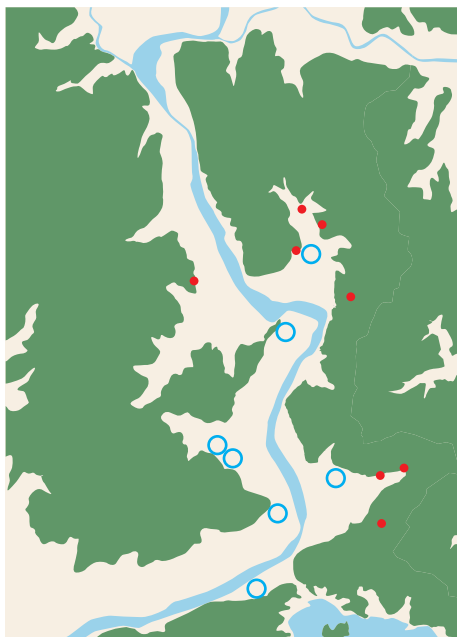


坂越湾周辺の古墳分布 平野のない坂越にある古墳は、漁業を生業とした集団の墓と考えられている。(撮影：出水伯明)

千種川は山に囲まれた狭い範囲を流れているため、大雨が降るとたびたび洪水が起き、大きな被害を与えていました。そのため古代のムラは千種川の洪水から免れることのできる土地に営まれるのが一般的でした。特に古墳は平野のムラから少し離れた山側に築かれることが多く、高雄地区では古代集落遺跡に隣接した山麓などで見つかっています。いずれも少し高いところにあり、当時の墓に対する考え方を推し量ることができます。

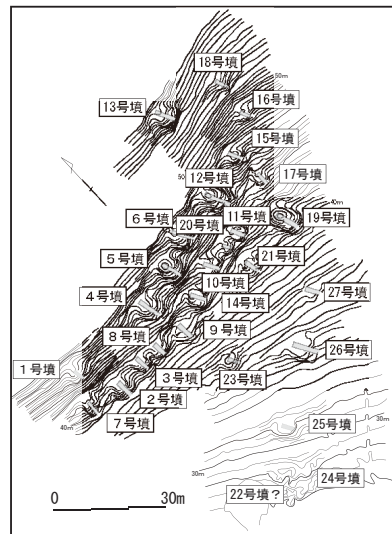
一方、坂越湾周辺では、今のところ古代集落遺跡がほとんど見つかっていませんが、大規模な古墳が島や山上に築かれています。有年地区や高雄地区のようなムラができる平野がないことから、これらの墓は漁業を生業とした集団の墓であると考えられています。

なお大避神社の神地である生島内の生島古墳は伝秦河勝墓として現在も神聖な場所とされています。



高雄～坂越地区の古墳分布

●古墳 ○集落遺跡
千種川の影響を受けにくい場所に集落遺跡が立地している。



周世宮裏山古墳群

非常に小規模な横穴式石室が密集する古墳群。無袖式のものほとんどである。



周世宮裏山古墳群

塩屋・西部地区の遺跡・古墳

塩屋・西部地区は近世頃に開発された土地が多く、残念ながら遺跡に恵まれていません。しかし大津の堂山遺跡では、縄文時代前期（約6,000年前）から晩期までの多数の縄文土器をはじめ、古墳時代以降の製塩土器が見つかっており、今後の調査が期待される地域です。また堂山遺跡では円筒埴輪片も出土しており、周囲に古墳の存在が推定されています。

弥生時代になると、高山で土器や石器が採集されています。その詳細はよくわかりませんが、非常に眺望の良い土地に住居を構えていた時代があったのかもしれませんが。またこの山麓部は古代に「石塩生荘」として東大寺の荘園が置かれた場所であり、山々は塩山として燃料調達に用いられました。

古墳としては折方の天神山古墳があり、坂越と同様、海に面して築かれていました。



堂山遺跡出土縄文土器
縄文時代前期から晩期まで続く
珍しい遺跡である。

尾崎・御崎地区の遺跡・古墳

尾崎・御崎地区は塩田のまちであり、中近世をさかのぼる歴史があるわけではありません。しかし塩田が築かれる前の縄文時代には、すでに人々が生活を営んでいた痕跡があります。

猪壺谷遺跡では、縄文時代後期の土器や石器が多数出土しています。縄文時代後期は、全国的にも見つかる遺跡数が増加する時期であり、海をわたって入植したのでしょうか。謎は尽きません。

もう一つ、瀬戸内海を臨む山上に尾崎・大塚古墳があります。6世紀後半から7世紀前半の後期古墳には両袖式の横穴式石室が築かれており、市内でも大型の部類に入ります。当時は周囲に水田をつくる場所もなかったことから、漁業に関連する生業のムラがあったのかもしれませんが。



尾崎・大塚古墳



尾崎・大塚古墳出土土器

赤穂城跡の発掘調査

国史跡赤穂城跡も遺跡の一つです。現在の赤穂城跡の前身である池田時代の城（搔上城）や、その前に築かれていた加里屋古城など、まだまだ謎が多く残されており、発掘調査によって今後明らかになることでしょう。

また赤穂城跡では発掘調査の成果を活かし、赤穂市のシンボルとなる史跡として、継続的な整備が行われています。

国史跡 赤穂城跡 赤穂市のシンボルとして継続的に整備が行われている。（撮影：出水伯明）



二之丸門跡
山鹿素行が縄張りを変更した二之丸門
枅形の基礎石が発見された。



三之丸大手門枅形
赤穂城の玄関口。改変される前の石垣
や旧上水道が見つかった。



三之丸清水門跡
現在の市立歴史博物館に隣接する門
跡。



本丸跡の発掘調査
御殿跡の発掘調査。右奥には本丸門が
整備された。



二之丸城壁でみつかった埋没石垣
現在の赤穂城の前に築かれた遺構と
考えられている。

赤穂城下町跡の発掘調査



発掘された町家跡

町家の玄関部分を発掘すると、敷地境界や間取り境界の石列が良好に見つかる。

赤穂城下町跡は、平成10年度から本格的な調査が始まり、予想以上に遺跡が残されていることがわかってきました。約400年前の標高は約1.0mであり、現在の約2.0mまで造成が繰り返された結果、町家の基礎構造がよく残されたためと考えられています。また地下水の影響で一般には腐ってしまう木簡などの木製品がよく残されていることも特徴の一つであり、今後の発掘調査によって赤穂の歴史を豊かに物語る可能性をもっている遺跡と言えます。



出土した陶磁器類

赤穂城下町は当初の標高が1.0mと低く造成が繰り返されたため、造成土内に多くの陶磁器類が見つかる。

赤穂城下町跡出土の主な木簡 (1) ※縮尺は任意です



発掘された木簡

赤穂城下町跡では地下水によって腐食から守られた木簡がよく出土する。武士や町人の名前が記されていることも多い。

旧赤穂上水道の発掘調査

旧赤穂上水道は、元和2 (1616) 年の切山隧道掘削完了によって敷設された水道で、「各戸給水」を成し遂げたことで日本三大水道の一つとされています。赤穂城下町跡の発掘調査を行うと、必ずと言ってよいほど見つかるこの遺構は、赤穂ならではのものと言えます。

発掘調査では、道路側から屋敷内に水を引き込むための給水管(竹、瓦、土、陶器製)のほか、会所(木製桶、箱枺)や汲出枺(木製、陶器製)などが数多く見付き、その変遷も徐々にではありますが明らかになってきています。

また、上水道が屋内に引かれる場所は決まって建物の入口(トオリニワ)部分であるため、発掘で見つかった建物遺構の入口を特定する重要な根拠にもなっています。

赤穂市ではこれらの発掘調査を実施しているほか、市街地の各所にモニュメントを設置し、その顕彰に努めています。

